

平成 20 年度指定

### 中山神社惣神殿（なかやまじんじゃ そうしんでん）

美作一宮である中山神社には、美作国内の数多くの神社あるいは末社が祀られていましたが、天文年間の兵火で全て消失しました。永禄 2 年（1559）の本殿再建の際、それらの 112 の神々を合祀して小祠を建て、惣神殿と称したのがはじまりです。

その後、寛保元年（1741）の本殿大修理の際、新たに社殿が建てられ、大正 2 年（1913）現在地に移転しました。

建物は一間社春日造りで、向拝唐破風付、屋根は桧皮葺、素木造り。桁行 8.25 尺、梁行 7.42 尺、向拝出 7 尺、縁幅 2.59 尺です。

この建物は、木鼻、蛙又、虹梁絵様等も本格的に作成され、彫物もしっかりとしており保存状況も良好なものです。中山神社本殿は、寛保元年の修理の際に相当の改修が加えられていますが、それらの改修部材との形式を比較することのできる、18 世紀中頃の神社建築の様相を今に伝える建物です。

（平成 20 年 10 月 30 日指定）



### 地藏院愛宕堂 附棟札（じぞういんあたごどう つけたり むなふだ）

この地には旧来から愛宕社が祀られていましたが、天和 3 年（1683）日光門主より改めて「愛宕山寿延寺 地藏院」の称号を受けました。現在の愛宕堂は、棟札から元禄 4 年（1691）11 月森家 4 代藩主長成により建てられたことがわかっています。

建物は桁行 1 間、梁行 2 間、1 間向拝付で屋根は入母屋造銅板葺、桁行 10 尺、梁行 13 尺です。

江戸時代の東照宮は神仏習合であり、本地佛を祀る佛寺が全体を管理するのが普通です。このような江戸時代の東照宮の形式は、明治政府が行った神仏分離政策によって消滅してしまいましたが、津山東照宮は神仏習合時代の形式をよく残しています。すなわち、地藏院は東照宮の本地院であり、愛宕堂はその中心建物になります。

この建物は、梁行 10 尺、桁行 13 尺と規模が大きく、隅木入り春日造りの整った形式がよく残っており、棟札により江戸中期の建立であることも明らかです。江戸時代における、津山地方の建築様式を知る上で標準的な資料になるものです。（平成 20 年 10 月 30 日指定）



平成 20 年度指定

### 大隅神社昭徳館（旧津山男子尋常高等小学校講堂）

（おおすみじんじゃしょうとくかん きゅう つやまだんしじんじょうこうとうがっこう こうどう）

昭徳館は明治 36 年（1903）津山男子尋常高等小学校の講堂として建てられ、昭和 3 年（1928）に現在地に移転されました。設計は、菊池大麓の教え子である津山中学美術教師柴山節夫です。



建物は 10 間× 8 間の規模で、中央に柱のない当時では珍しい大型建物でした。木造平屋建てで、屋根はセメント瓦葺寄棟造、南側に掃出しの縁側が付いています。東側は間口 2 間の玄関に式台が設けられ、上部には畳 1 畳大の平沼淑郎（ひらぬま よしろう）揮毫による「昭徳館」の額が掲げられています。

屋内は 9 間× 8 間で、上座中央に間口 3 間奥行半間の床が設けられ、その左右にはそれぞれ 4 枚引きの舞良戸となっています。天井高は 13 尺で、全面一間五つ割間隔の竿縁天井です。また、中央部の一部は竿間隔 6 本の方形折り上げ天井となっています。小屋組みにはトラス工法が採用され、建物西側には、昭和 4 年（1929）に増設された宮司の居宅兼社務所が隣接しています。

昭徳館は、明治末期という時代の変遷期の建物の様子を今に伝えるもので、この種の構造および規模の建物は現在では貴重なものとなっています。（平成 20 年 10 月 30 日指定）

### 千磐神社のスギ（ちわじんじゃのすぎ）

千磐神社は、JR 因美線知和駅から阿波方面に向けて約 700m ほど進んだ位置にあります。参道は、矢筈城の登山道を兼ねています。

神社は、もとは王子権現と称し素戔嗚命を主祭神として奉祀され、末社の矢筈神社は、矢筈城主草刈氏の鎮守神として城内に奉祀された神社で、その後現在地に移されたものです。



（中央がスギ、左は臥龍藤）

スギは社殿前にあり、御神木として崇められている二股大杉です。幹周 5.4m、樹高約 40m、推定樹齢 660 年とされ、市内でも数少ない大樹です。なお、幹には推定樹齢 620 年とされる大きな藤が絡まり、臥龍藤と呼ばれています。（市指定天然記念物）（平成 20 年 10 月 30 日指定）

**地藏院本堂（旧東照宮社殿）**（じぞういんほんどう きゅう とうしょうぐう しゃでん）

旧東照宮の建物は、文化 11 年（1814）に建てられたもので、社殿・唐門・総門の 3 棟が現存しています。しかし、いずれも昭和 40 年（1965）3 月竣工の市立鶴山幼稚園建設により原位置から移動し、社殿は地藏院本堂、唐門は愛山廟表門、総門は市内大谷の教本寺表門となっています。

建物は拝殿が桁行 5 間、梁間 3 間、向拝 1 間、入母屋造棧瓦葺、合の間が正面 1 間、側面 1 間、両下造、棧瓦葺、そして本殿が桁行 3 間、梁間 2 間、入母屋造銅板葺です。



東照宮社殿は、本殿と拝殿とを合いの間でつなぐいわゆる権現造で、屋根は共に入母屋造です。現在では拝殿・合いの間は棧瓦、本殿は銅板葺きですが、当初はとち葺であったことが判っています。なお、使用材は主要部分を良質のケヤキで揃え、一部にトガが混じっています。

藩主が直接関わったものであることから建物としては一級品で、中でも、本殿は総円柱にして蛇腹支輪付の出組とするなど特に上等に造られています。津山の歴史を語るうえで欠かすことのできない重要な建物です。（平成 21 年 3 月 26 日指定）